

平成30年6月18日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03166

研究課題名（和文）近代芸術におけるディレッタントの学際的研究

研究課題名（英文）Interdisciplinary Research on Dilettantism in Modern Arts

研究代表者

佐藤 直樹（Sato, Naoki）

東京藝術大学・美術学部・准教授

研究者番号：60260006

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,000,000円

研究成果の概要（和文）：ヨーロッパでは18世紀になると裕福な市民層から「ディレッタント」や「アマチュア」と呼ばれる芸術を職業としない愛好家たちが登場する。彼らは王侯貴族の芸術教育をまねて、音楽会や素描、朗読会などのサロンを主催し始めるのである。そうした芸術の市民化は、趣味の向上をもたらすだけでなく、新しい理想的な芸術家像を形作るモデルとなっていく。生業ではなく「芸術のための芸術」に携わることが尊いこととなり、現代に続く理想的な芸術家像がこの頃誕生したのではないだろうか。本研究では、ディレッタント活動の盛んであったドイツ、ヴァイマルに焦点を合わせて、近代的芸術家像の誕生を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In 18th Century Europe, many "Dilettantes" and amateurs played an active role in the art milieu. They belonged to the bourgeois class and were not professionals in art, but they organized concerts, reading and sketch circles in their salons. Such a salon culture imitated the art education of the monarchal courts. The activities of the Dilettantes spread quickly and helped develop "good taste" in the bourgeoisie. In consequence, they became a new model for the ideal artist, who do not create for making a living but for art itself. "Art for art" is a concept with a noble value, which generated the modern ideal artist. Thus we are able to see how the modern artist originated. The research project clarifies the birth of the modern artist, focusing especially on the art milieu in Weimar Dilettantes.

研究分野：美術史

キーワード：ディレッタント アマチュア ヴァイマル 18世紀 素描 ゲーテ 女性 宮廷

### 1. 研究開始当初の背景

西洋美術史をかたちづくるのは、いわゆる名作の歴史である。本研究の着想は、そうした「主流」の美術史からこぼれおちた「芸術愛好家＝ディレタント」たちによる作品が、当時の美術界に何の影響も与えることがなかったか、という疑問から始まっている。とりわけ、ルネサンス期の王侯貴族、あるいは18世紀以降の市民階級による美術制作が実はプロの美術家との交流を通して相互に影響しあった可能性を研究調査したいという美術史的なひとつの試みであった。

また、本研究の実施にあたり学際的な視野を必ず加えることを目指した。芸術愛好家たちの活動は美術だけにとどまるものでは決してないからだ。音楽、文学、演劇と、彼らの興味は多岐にわたる。そのため、全体像を把握するには、各分野の専門家の協力が不可欠であった。以上二つの興味を背景に、本研究は進められた。

### 2. 研究の目的

18世紀になるとヨーロッパの都市部では「ディレタント」（芸術を職業としない芸術愛好家）を自認する王族や裕福な市民らが音楽会や素描、朗読会などを楽しむサロンを主催し始め、芸術が多層的な様相を見せるようになる。そこで交流から、文学者や音楽家による素描実践、あるいは美術家による演奏や詩作などの越境的な創作が始まった。とりわけ「素描」は、世界を把握するための手段として富裕層の教育に定着していたこともあり、音楽家や文学者による多数の素描が残されている。しかし、いわば近代芸術の新たなジャンルを形成したに等しいディレタントの創作活動は、これまで包括的に研究されたことがなかった。「芸術のための芸術」を目指す近代芸術の理念的な源流であるにも拘らず、専門的な仕事でないという理由から、その価値は等閑視されてきたからである。

ルネサンスからバロックにかけてのディレタントは「知的受容者」にとどまっていた。しかし、近代西洋の社会変化に伴い、人々は職業意識を高めると同時に、芸術活動を自分の職業領域とは違うものとして心理的に分離し、認識し始めるようになる。その分離した領域こそが新時代の「ディレタント」の生じる場であった。17世紀以降、美術アカデミーが美術活動の中右心を占めたことで、美術界は次第に権威主義化し機能不全に陥る停滞した文化環境のなかで、ディレタントたちは自由に生き生きと活動し始めるのである。しかも、彼らの創作活動は生業ではないため、芸術として純粋性を担い始めることとなる。こうした時代に、ゲーテとシラーは、それまでの「受容的」なディレタントのイメージを「能動的」なものへと大きく転換させる思考を展開する。それは手書き草稿「ディレタントに関する見取り図」(1799年)

で明らかに示された。各芸術分野に関するディレタントのあり方を告別分析し、未来にむけて肯定的に置き換えていくための方法を具体的に提示した。また同年に著された論文『ディレタントイズムについて』(出版は1833年)のなかで「ディレタントとは芸術愛好家のことだが、作品を鑑賞したのしむだけではなく、制作を実行する人のこと」と明確に定義する。こうした考え方は、彼らの他の出版物においても垣間見ることができ、論文は出版されずとも、ディレタントは「芸術のための芸術家」であり、「職業的な成果を求めるのではなく、ただ芸術活動の瞬間において芸術家たろうと努める人」へと大きく舵を切っていくきっかけとなった。まさに彼らの思想こそ、近代的な「理想的芸術家」像の形成に重要な役割を果たしたと思われる。そうすると、これまで等閑視されてきたディレタントたちの活動を研究することこそが、近代的芸術家の誕生を明らかにすることに他ならないと思われるのである。

### 3. 研究の方法

初年度には、ディレタント概念の変遷を古代から近世まで確認した上で、18世紀の初年度には、ディレタント概念の変遷を古代から近世まで確認した上で、18世紀の宮廷における君主らの音楽と美術の活動から始めたい。同時に、都市部富裕層における美術および音楽教育の在り方を調査研究し、宮廷でのディレタント活動が貴族を経てブルジョワ層に伝播した環境も明らかにする。また、この時代のサロンにおける演奏会や素描会、朗読会などの「芸術実践の場」が、主に教養ある女性たちの催しであったことに着目し、宮廷やサロンでの交流によって生じた越境的芸術活動の萌芽を認めつつ、そこで得られた刺激によって生じた制作活動における変容も明らかにする。芸術愛好家としての女性ディレタントたちがアートシーンに果たした役割に関しては、これまでほとんど研究されることがなく、その活動と影響力に光を当てることは本研究の重大な意義となる。同様に、これまでゲーテの素描自体を文筆活動の余技と捉え、美術作品として位置づけてこなかった点も、近代芸術研究における大きな不備であった。ローゼンバウムは、作品の質の問題を視野に入れることでこの点に異議を唱えたが、彼が対象としたのはゲーテとその時代、つまり18世紀における「美術」のディレタントのみであったため、続く19世紀に増大したディレタントたちの画期的な制作活動が全く扱われていない。同氏の研究対象は、肯定的なディレタントの誕生期を論じることに限定されているのである。したがって、本研究の目的は、ローゼンバウムの研究を継承しながら、19世紀に続くディレタントの活躍を中心課題に

据え、ダイナミックに動き出すヨーロッパの芸術界で彼らが果たした役割を突き止めることにある。これまで、ディレタントの活動と作品は素人の余技として過小評価され、アカデミー出身の職業芸術家たちと対立するという観点から、長く研究対象にされず空白の状態であったが、本研究を通じてディレタントの活動が決して周縁的ではなく、実質的には職業芸術家たちを支え、場合によっては支配してきたという事実が掘り起こされるに違いない。最終的には、ディレタントが近代芸術そのものを形作っていくこと、あるいは近代芸術の出自であったということをはっきりさせる。2年目には、初年度に行った前史と概念の確認、および18世紀のディレタント研究とその成果に関する意見交換をふまえた上で、各々が19世紀ディレタントたちの個別研究をさらに進めた。そのために科研の研究者全員でドイツにおけるディレタントたちの作品の実地調査を行った。なかでも、ゲーテ、メンデルスゾーン、C.G.カールスの三者に焦点を合わせることにした。共同研究の充実が2年目の主要課題であった。共同で作品調査に取り組む際、美術における文芸および音楽活動の影響、あるいは音楽における美術作品の痕跡などを探ることが具体的な課題である。本研究の最大の特色である学際的な観点を得るため、この共同調査で、ディレタント作品イメージと越境分野の課題を全員で共有することができた。ベルリンのシャルロッテンブルク宮殿での音楽活動調査、ベルリンの古文書館ではメンデルスゾーンの素描や楽譜の調査にあたり、ヴァイマル古典財団ではゲーテの素描および「ディレタントに関する見取り図」のオリジナル原稿の閲覧、そしてドレスデン国立美術館においてはカールス作品の調査を行った。全員で研究対象作品を実見することで、問題解決に有用な視点を相互補完することが可能となる。本研究の学際的な組織が最も生かされる調査方法であろう。

最終年度は、これまでの研究と調査旅行で得られた新知見の総括にあてる。東京芸術大学を会場に、我々共同研究者の他に国内外の研究者を加えて国際シンポジウムを開催し報告書の出版を目指す。シンポジウム後は、国際プロジェクトとして拡大継続する可能性を探る。

#### 4. 研究成果

初年度には、ディレタントの概念の変遷を古代から近代まで外観し、18世紀の宮廷における君主や貴族たちの活動を中心に確認した。その上で『芸術家としてのアマチュア』(A.ローゼンバウム、2010年)に拠りながら、ゲーテとシラーによって誕生したドイツの新たな「ディレタントの概念」を明らかにした。本書以降、欧州におけるディレ

タントは能動的なイメージに大きく舵を切ることとなった。それは、ディレタントを単なる「芸術の受容者」(否定的)から「芸術のための芸術家」(肯定的)へと転換した歴史的出来事であった。このようにゲーテとシラーによって作られた新たなディレタント像の軸に据え、その前後の時代におけるディレタントを各分担者が調査研究しつつ、ディレタントの変遷史をつくりあげた。その結果、ゲーテとシラーの活躍したヴァイマル公国でどのようにして彼らが「新たな」ディレタント像を作り出すことに至ったか、その文化環境をアンナ=マリア妃の主催するムーゼンホーフの活動にあることも見えてきた。そこにはイギリス人のディレタント、チャールズ・ゴアが存在があり、ゲーテとの関係も確認できたことから、次年度の研究に展望を開くことができた。

2年目には、ドイツのヴァイマルを中心に、研究メンバー全員参加の共同調査旅行を行った。共同調査旅行では、まず、フリードリヒ大王の宮廷での音楽活動および美術収集をポツダム宮殿のサン・スーシ宮殿で検討、メンデルスゾーンの素描作品をベルリン国立図書館において調査した。また、C. D. フリードリヒの友人で医学者C. G. カールスの作品に関しては、ドレスデン版画素描館および絵画館で作品を目の前に同館の学芸員とディスカッションを行った。このような共同作品調査の意義は、ディレタント作品のイメージを共有することに加え、何よりも美術における文芸および音楽活動の影響、あるいは音楽における美術作品の痕跡などを相互協力により学際的な観点から探求することにある。この共同調査で重要な問題意識を共有することができた。調査旅行の主目的地であるヴァイマル古典財団では、同財団の研究部門長トルステン・ファルク氏からヴァイマル宮廷のディレタント活動に関するレクチャーを受け、活発な意見交換をすることができた。

最終年度には、予定通り国際シンポジウム「ドイツ近代芸術におけるディレタントイデオロギズム」を10月27日、28日の二日間で開催した。本科研の研究メンバー7名は、これまでの三年間の研究の総括となる素晴らしい成果を発表してくれた。このシンポジウムには、昨年の調査旅行における学術交流のなかで貴重な意見をくれたヴァイマル古典財団のトルステン・ファルク氏、ヤナ・ピーパー氏、ミュンヘン中央美術史研究所所長のウルリヒ・フィステラー氏、ドレスデン国立美術館のゴールドウラ・ビショッフ氏の4名を招聘した。いずれの発表も、本研究の方向性の正しさを示してくれるだけでなく、次への研究につながる視野を広げてくれるものであった。本研究の学際的な特徴を生かしたシンポジウムは、美術史だけでなく音楽、文学、教育学に関する分野にま

たがっていたこともあり、初日には 95 名、二日目には 102 名と、大盛況のなか大変意義深い討論が繰り広げられた。特に、二日目には大角欣矢氏の研究テーマであった 18 世紀ヴァイマルを率いるディレッタント、アンナ=アマリア公妃が作曲したジグシュピール「エルヴィンとエルミーレ」の日本における初演が行われ、日本の音楽学研究史において重要な一頁となった。シンポジウムの最後には、三年間の研究を総括するように、ディレッタントは、狭い領域でのみ活動する専門的芸術家とは異なり、幅広い芸術活動を通じて、因習や伝統にとらわれない新しい芸術を作り上げる役割を担っていることが見えてきた。それゆえ、現代の芸術家たちが目指す理想的芸術家像のモデルが、この時代のディレッタントにあるのではないかという結論に至ったのである。本シンポジウムは、研究者だけでなくアーティストにも新しい視点を提供する結果となり、参加者からも高い評価を得ている。報告書は、三元社から一般書籍として 2019 年の秋までに出版予定であり、5 月現在、原稿の入稿を終え、刊行準備の作業中である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計 6 件)

仲間裕子「C.D. フリードリヒのロマン主義的風景と文学」『立命館言語文化研究』査読無、29 巻、2018 年、pp. 1717-195.

佐藤直樹「ローマ：19 世紀のアルカディア-外国人芸術家たちの活動と交流」『日伊総合研究所報』査読無、13 巻、2017 年、pp. 39-40

小松佳代子「1. Genealogy of self-expression: a reappraisal of the history of art education in England and Japan」*Paedagogica Historica*, 査読有 2017, pp. 214-227.

小松佳代子「Art Education as Folding and Unfolding of Things」*Journal of Education and Training Studies*, 査読有 vol. 5, No. 8, 2017, pp. 101-105.

眞岩啓子「(書評)Karrin Klinger, Die Anfaenge der Weimarer Zeichenschule (1774-1806). Zwischen Fachausbildung und Dilettantismus」『日本 18 世紀学会年報』査読無、31 巻、2017 年、pp. 66-68.

佐藤直樹「Malerei und Fotografie um 1900: Helene Schjerfbeck und die Fotografie」*Aspects of Problems in Western Art History*, 査読無、Vol. 15, 2017, pp. 59-72.

##### [学会発表](計 21 件)

佐藤直樹「ディレッタント研究序説-その歴史と展開の見取り図」国際シンポ

ジウム「ドイツ近代芸術におけるディレッタントイズム」(国際学会) 2017 年 10 月 27 日、国立西洋美術館

佐藤直樹「王族たちの美術活動-ザクセン宮廷の素描と旋盤細工」国際シンポジウム「ドイツ近代芸術におけるディレッタントイズム」(国際学会) 2017 年 10 月 28 日、東京藝術大学

眞岩啓子「ゲートのディレッタントイズム-『収集家とその友人たち』と『ディレッタントイズムについて』」国際シンポジウム「ドイツ近代芸術におけるディレッタントイズム」(国際学会) 2017 年 10 月 28 日、東京藝術大学

大角欣矢「ヴァイマル公妃アンナ=アマリアのジグシュピール《エルヴィンとエルミーレ》-音楽史の文脈から」国際シンポジウム「ドイツ近代芸術におけるディレッタントイズム」(国際学会) 2017 年 10 月 28 日、東京藝術大学

星野宏美「作曲家フェリクス・メンデルスゾーン・バルトルディと素描:スイス旅行を例にして」国際シンポジウム「ドイツ近代芸術におけるディレッタントイズム」(国際学会) 2017 年 10 月 28 日、東京藝術大学

尾関幸「ディレッタントの芸術としてのランド・スケープ-ゲートからヘルマン・フォン・ピュックラー=ムスカウ

へ」国際シンポジウム「ドイツ近代芸術におけるディレッタントイズム」(国際学会) 2017 年 10 月 28 日、東京藝術大学

仲間裕子「ディレッタントイズムと近代社会:カール・グスタフ・カールスの芸術理念」国際シンポジウム「ドイツ近代芸術におけるディレッタントイズム」(国際学会) 2017 年 10 月 28 日、東京藝術大学

小松佳代子「教育学から見たディレッタントイズムの可能性」国際シンポジウム「ドイツ近代芸術におけるディレッタントイズム」(国際学会) 2017 年 10 月 28 日、東京藝術大学

小松佳代子「Qualitative Intelligence and Art Education: The possibility of Arts-based Research」35th World InSEA Congress(国際学会) 2017 年

星野宏美「メンデルスゾーンとその家族:ファニー・メンデルスゾーン=ヘンゼル」フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ基金日本支部 2017 年の集い、2017 年

仲間裕子「Invisible air: How it is made visible in Japanese art, Joint Workshop "Landscapes in Art, Theory, and Practice across Media, Time, and Place"」Freie Universitaet Berlin(招待講演)(国際学会)、2017 年

仲間裕子「C.D. フリードリヒ ロマン主義的風景と文学」国際カンファレンス

「風景と文学、文学と風景」(国際学会) 2017年03月18日、立命館大学国際言語文化研究所

小松佳代子「Art Education as Folding and Unfolding of Things」国際シンポジウム「教育空間におけるモノの意味」(国際学会)2017年3月11日、慶應義塾大学

佐藤直樹「近代的ディレクタントイズムの萌芽 ザクセン宮廷における君主たちの美術教育」美術史学会東支部例会(招待講演)2016年12月17日、国立西洋美術館

星野宏美「ニルス・ゲーゼ生誕200年を前にしてーメンデルスゾーンとゲーゼ」 「メンデルスゾーン・ディスクヴァリー」シリーズ第1回(招待講演)2016年12月1日五反田文化センター・音楽ホール

小松佳代子「美術教育の可能性- “もの” を介した質的知性の形成-」長野県美術教育研究会第70回大会(招待講演)2016年11月11日、高遠さくらホテル

小松佳代子「美術制作におけるモノの重層性」教育哲学会ラウンドテーブル、2016年10月10日、東京大学

星野宏美「風景と音ーメンデルスゾーンの旅先の記憶と記録」シンポジウム「メンデルスゾーンとスイス」フェリックス・メンデルスゾーン =バルトルディ基金(招待講演)2015年11月28日、日仏文化教会 汐留ホール

佐藤直樹「フェリックス・メンデルスゾーンの素描芸術ーロマン派の写実的表現について」シンポジウム「メンデルスゾーンとスイス」フェリックス・メンデルスゾーン=バルトルディ基金(招待講演)2015年11月28日、日仏文化教会 汐留ホール

小松佳代子「The Genealogy of Self Expression:A Comparative History of Art Education in England and Japan」The European Conference on Education Research(国際学会)2015年9月10日、ブダペスト・コルヴィヌス大学

- ⑳ 仲間裕子「Art and Nature: An Aesthetic View on Value」International Philosophical Forum on Values(招待講演)(国際学会)2015年06月07日、北京大学

〔図書〕(計8件)

小松佳代子 他、共同出版、臨床教育学、2017年、238

尾関幸 他、中央公論新社、西洋美術の歴史7：19世紀近代美術の誕生、ロマン主義から印象派へ、2017年、579

佐藤直樹 他、竹林舎、ウィーン -総合芸術に宿る夢(西洋近代の都市と芸術4)

2016、541

尾関幸 他、 Wilhelm Fink, Japanisch-deutsche Diskurse zu deutschen Wissenschafts- und Kulturphänomenen, 2016, 295

星野宏美 他、フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ基金日本支部、メンデルスゾーン基金講演録、2016年、131

星野宏美 他、Laaber, Felix Mendelssohn Bartholdy: Interpretationen seiner Werke, 2016, 1278

尾関幸 他 竹林舎、ベルリン 砂上のメトロポール(西洋近代の都市と芸術5)2015、480

仲間裕子 他、Leo S. Oltschiki Editore, Riflessi del Collezionismo tra Bilanchi Critici e Nuovi Contributi, 2015, 380

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者  
佐藤直樹 (SATO, Naoki)  
東京藝術大学・美術学部・准教授  
研究者番号：60260006

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者  
大角欣也 (OSUMI, Kinuya)  
東京藝術大学・音楽学部・教授  
研究者番号：90233113

小松佳代子 (KOMATSU, Kayoko)  
長岡造形大学・造形研究科・准教授  
研究者番号：50292800

尾関幸 (OZEKI, Miyuki)  
東京学芸大学・教育学部・准教授  
研究者番号：10361552

星野宏美 (HOSHINO, Hiromi)  
立教大学・異文化コミュニケーション学  
部・教授  
研究者番号：40339586

仲間裕子 (NAKAMA, Yuko)  
立命館大学・産業社会学部・教授  
研究者番号：70268150

(4)研究協力者

眞岩啓子 (MAIWA, Keiko)  
早稲田大学・文学部・非常勤講師